

漱石全集

第十一卷

漱石全集
第十一卷

評論

雜篇

昭和四十一年十月十六日印刷

昭和四十一年十月二十四日發行

漱石全集 第十一卷 評論 雜篇

定價 千貳百圓

著者

夏目漱石

發行者

岩波雄二郎

發行所

株式會社
東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地
岩波書店

目次

評論

作物の批評

一一

寫生文

二二

文藝の哲學的基礎

三〇

創作家の態度

九七

田山花袋君に答ふ

一八四

文壇の趨勢

一八七

コンラツトの描きたる自然に就て

一九二

明治座の所感を虚子君に問れて

一九五

虚子君へ

一九九

太陽雜誌募集名家投票に就て	二〇五
「額の男」を読む	二一四
「夢の如し」を読む	二二〇
日英博覽會の美術品	二二三
東洋美術圖譜	二二七
客觀描寫と印象描寫	二三一
草平氏の論文に就て	二三四
長塚節氏の小説「土」	二三七
文藝とヒロイック	二四〇
艇長の遺書と中佐の詩	二四三
鑑賞の統一と獨立	二四六
イズムの功過	二五〇
好惡と優劣	二五三
博士問題とマードック先生と余	二五八

マードック先生の日本歴史	二六六
博士問題の成行	二七一
文藝委員は何をするか	二七四
田中王堂氏の「書齋より街頭へ」	二八三
坪内博士とハムレット	二八六
學者と名譽	二九二
道樂と職業	二九五
現代日本の開化	三一九
中味と形式	三四四
文藝と道徳	三六六
文展と藝術	三八九
素人と黒人	四二一
私の個人主義	四三一
津田青楓君の畫	四六四

點頭錄

四六七

雜篇

〔イギリスの繪本の卷頭に〕

四九一

〔小宮豐隆に贈りたる扇に〕

四九二

入社 の 辭

四九三

『虞美人草』豫告

四九七

〔自著を贈る言葉〕

四九八

『三四郎』豫告

四九九

『それから』豫告

五〇〇

元 日

五〇一

霞寶會設立主旨

五〇四

稟 告

五〇五

〔子規書幅添書〕

五〇六

〔學位問題に就いて〕

五〇七

余と萬年筆

五〇九

明治天皇奉悼之辭

五一四

『彼岸過迄』獻辭

五一五

行人續稿に就て

五一六

『心』廣告文

五一七

序 文

小羊物語に題す十句——小松武治譯『沙翁物語集』序——

五二一

浦瀨
白雨譯『ウォルツヲオスの詩』序

五二五

『吾輩は猫である』上篇自序

五二六

『漾虛集』自序

五二八

『吾輩は猫である』中篇自序

五二九

『鶉籠』自序

五三三

鈴木三 重吉作	『千代紙』序	五三五
平井 晚村著	『野葡萄』序	五三六
	『吾輩は猫である』下篇自序	五三八
藪野 棕十著	『東京見物』序	五四〇
本間久 四郎譯	『名著新譯』序	五四二
森田草平 生田長江 共著	『草雲雀』序	五四四
生田 長江著	『文學入門』序	五四七
高濱 虛子著	『鷄頭』序	五五〇
松根東 洋城選	『新春夏秋冬』春之部序	五六一
沼波瓊音 天生目杜南 共編	『古今名流俳句談』序	五六二
松根東 洋城選	『新春夏秋冬』夏之部序	五六三
松根東 洋城選	『新春夏秋冬』秋之部序	五六五
樋口 銅牛著	『俳諧新研究』序	五六六
森田 草平著	『煤煙』第一卷序	五六八

〔川井田〕『英語會話』序

五七二

中村畫『不折俳畫』上序

五七四

自然を離れんとする藝術——『新日本畫譜』の序——

五七七

池邊君の史論に就て——『明治維新三大政治家』再版序——

五八二

『土』に就て——長塚節著『土』序——

五八八

秋元編『三愚集』序

五九五

秋元編『明治百俳家短冊帖』天之卷序

五九六

高原著『極北日本』序

五九七

『社會と自分』自序

六〇〇

ふぢ子作『相模の埃』紹介

六〇一

野上八重子譯『傳説の時代』序

六〇二

想田秋曉編『高岳』題言

六〇六

米窪太刀雄著『海のロマンス』序

六〇七

保坂一著『吾輩の見たる亞米利加』下篇序

六一〇

岡本一平『探訪畫趣』序

六一二

『心』自序

六一五

木村恒譯『南國へ』再版序

六一七

木下全太郎著『唐草表紙』序

六一九

『硝子戸の中』自序

六二五

植松安譯『文藝批評論』序

六二六

縮刷に際して——縮刷『社會と自分』自序——

六二九

『金剛草』自序

六三〇

題丙辰潑墨——不折山人著『丙辰潑墨』第一集序——

六三三

解 說

六三五

注 解

六六一

評

論

作物の批評

中學には中學の課目があり、高等學校には高等學校の課目があつて、之を修了せねば卒業の資格はないとしてある。その課目の數やその安排の順は皆文部省が制定するのだから各擔任の教師は委託をうけたる學問を其時間の範圍内に於て出來得る限りの力を盡すべきが至當と云はねばならぬ。

然るに各課擔任の教師は其學問の専門家であるが爲め、専門以外の部門に無識にして無頓着なるが爲め、自己研究の題目と他人教授の課業との權衡を見るの明なきが爲め、往々わが範圍以外に飛び超えて、わが學問の有效を、他の領域内に侵入して迄も主張しやうとする事がある。たとへば英語の教師が英語に熱心なるの餘り學生を鞭撻して、地理數學の研修に利用すべき當然の時間を割いて迄も難句集を暗誦させる様なものである。たゞに夫のみではない、わが專攻する課目の外、わが擔任する授業の外には天下又一の力を用ゐるに足るものなきを吹聴し來るのである。吹聴し來る丈ならまだいい。果はあらゆる他の課目を罵倒し去るのである。

かゝる行動に出づる人の中で、相當の論據があつて公然文部省所定の課目に服せぬものはこゝに引き合に出す限りではない。それ程の見識のある人ならば結構である。四角に仕切つた芝居小屋の枡見た様な時間割のなかに立て籠つて、土龍の如く働いてゐる教師より遙かに結構である。然し英語文の本城に生涯の尻を落ちつけるのみならず、櫓から首を出して天下の形勢を視察する程の能力さへなきものが、徒らに自尊の念と固陋の見を拘り合せたる如き没分曉の鞭を振つて學生を精根のつく限りたゞいたなら、はじめなのは學生である。熱心は敬服すべきである。精神は嘉すべきである。其善意的なるも亦多とすべきである。あるにも拘らず學生は迷惑である。當該課目に於ける智識が缺乏する爲めではない、當該課目以外の智識が全然缺乏してゐるからである。たゞ缺乏してゐるからではない。其結果として入らぬ所迄のさばり出て、要もない課目を打ちのめさねば已まぬ底の勇氣があるから迷惑なのである。

是等の人は自己の主張を守るの點に於て志士である。主張を貫かんとするの點に於て勇士である。主張の長所を認むるの點に於て智者である。他意なく人の爲めに盡さんとするの點に於て善人である。只自他の關係を知らず、眼を全局に注ぐ能はざるが爲め、わが縄張りを設けて、いゝ加減な所に幅を利かして満足すべき所を、足に任せて天下を横行して、憚からぬのが災になる。人が咎めれば云ふ。おれの地面と君の地面との境はどこだ。境は自分がきめぬで、人の方ではとうから定めてゐる。再び咎めれば云ふ。此通り足が達者でどこへでも歩いて行かれるぢやないか。足の達者なのは御意の通りである。足に任せて人の畠を荒らされては困ると云ふのである。かの志士と云ひ、勇士と云ひ、智者と云ひ、善

人と云はれたるものも是に於てか忽ちに浪人となり、暴士となり、盲者となり、悪人となる。

今の評家のあるものは、ある點に於て此教師に似て居ると思ふ。尤も尊敬すべき言語を以て評家を翻譯すれば教師である。尤も謙遜したる意義に於て作家を解釋すれば生徒である。生徒の點數は教師によつて定まる。生徒の父兄朋友と雖も此權利を奈何ともする事は出來ん。學業の成績は一に教師の判斷に任せて、不平をさしはさまざるのみならず、却つて之によつて彼等の優劣を定めんとしつゝある。一般の世間が評家に望む所は正に是に外ならぬ。

たゞ學校の教師には専門がある。擔任がある。評家はこゝ迄發達して居らぬ。たまには詩のみ評するもの、劇のみ品するものもあるが、然しそれすら寥々たるものである。のみならず是等の分類は形式に屬する分類であるから、専門として獨立する價值があるかないか既に疑問である。して見ると、つまりは純文學の批評家は純文學の方面に關するあらゆる創作を檢閲して採點しつゝある事になる。前例を布衍して云ふと地理、數學、物理、歴史、語學の試験を只一人で擔任すると同様な結果になる。

純文學と云へば甚だ單簡である。然し其内容を論ずれば千差萬別である。實は文學の標榜する所は何と何で其表現し得る題目は如何なる範圍に跨がつて、其人を動かす點は幾ヶ條あつて、是等が未來の開化に觸るゝときどこ迄押擴げ得るものであるか、未だ何人も組織的に研究したものが居らるのである。また頗る出來にくいのである。

かう云ふては分らんかも知らぬ。例を擧げて二三を語ればすぐに合點が行く。古い話であるが昔しの

人は劇の三統一^{*}と云ふ事を必要條件の様に説いた。所が沙翁の劇は是を破つてゐる。しかも立派に出來てゐる。して見ると統一が劇の必要であると云ふ趣味から沙翁の作物を見れば失望するにきまつてゐる。或は駄作になるかも知れぬ。然し是が爲めに統一論の價值がなくなつたのではない。其價值がモヂフハイされたのであると思ふ。だから此條件を充たした劇を見れば矢張それなりに面白い。其代り沙翁の劇を賞翫する態度でかゝつてはならぬ。讀者の方で融通を利かして、其作物と同じ平面に立つ丈の餘裕がなくてはならぬ。外に一例をあげる。又沙翁を引合に出すが、あの男のかいたものは頗ぶる亂暴な所がある。劇の一段^{シーン}がたつた五六行で、始まるかと思ふとすぐ仕舞はねばならぬと思ふのに、作者は大膽にも平氣でいくらでも、こんな連鎖を設けてゐる。無論マクベスの發端の様に行數は短かくても、興味の上に於て全篇を貫く重みのあるものは論外であるが、平々凡々たる而も十行内外の一段を設けるのは、話しの續きをあらはす爲め已を得ず挿入したのだと見え透く様に思はれる。換言すれば彼の戯曲のあるものは齣幕^{*}の組織に於て明かに比例を失してゐる。だから比例丈を眼中に置いてマーチャント、オブ、ゼニスを読むものは必ず失敗の作だと云ふだらう。マーチャント、オブ、ゼニスは此點から讀むべきものでないと云ふ事がわかる。又沙翁を引き合に出す。オセロは四大悲劇の一である。然し讀んで決して好い感じの起るものではない。不愉快である。(今は其理由を説明する餘地がないから略す)もし感じ一方を以てあの作に對すれば全然愚作である。幸にしてオセロは事件の綜合と人格の發展が非常にうまく配合されて自然と悲劇に運び去る手際がある。讀者は夫を見ればいい。日本の芝居の仕組は支離滅裂